

ゆうかり放送委員会提供  
**ゆうかりに乾杯**  
第122回放送の概要（2017年6月24日放送）

**パーソナリティ**

たろう

（佃 由晃）

なか

（中嶋邦弘）

かりん

（妹尾優香）

あな

（岸本幸恵）



**ミキサー**

門ちゃん

（門田成延）

**会計**

小山俊則

**相談役**

わだかん

（和田幹司）

**1. オープニング**

昨日6月23日は沖縄慰霊の日でした。沖縄防衛軍の司令官と参謀長が自決した1945年6月23日を、日本軍の組織的戦闘が終結した節目とし、県条例によりこの日を沖縄戦の霊を慰めて平和を祈る日としました。今年の沖縄戦全戦没者追悼式で朗読された宮古高校3年生、上原愛音（ねね）さんの「平和の詩」を紹介します。

**誓い～私達のおばあに寄せて 上原愛音**

今日も朝が来た。

母の呼び声と、目玉焼きのいい香り。

いつも通りの 平和な朝が来た。

七十二年前 恐ろしいあの影が忍びよるその瞬間まで おばあもこうして 朝を迎えたのだろうか。

おじいもこうして 食卓についたのだろうか。

爆音とともに この大空が淀んだあの日。

おばあは 昨日まで隠れんぼをしていたウージの中を 友と歩いた砂利道を 裸足のまま走った。

三線の音色を乗せていた島風に 鉄の臭いが混じったあの日。

おじいはその風に 仲間の叫びを聞いた。

昨日まで温かったはずの冷たい手を握り 生きたいと泣く 赤子の声を抑えつけたあの日。

そんなあの日の記憶が 熱い血潮の中に今も確かにある。

決して薄れさせてはいけない記憶が 私の中に 私達の中に 確かに刻まれている。

少女だったおばあの 瞳いっぱいにとまった涙を まだ幼かったおじいの 両手いっぱい握りしめたあの悔しさを 私達は確かに知っている。

広がりゆく豊穡の土に芽吹きが戻り 母なる海がまた エメラルドグリーンに輝いて 古くから愛された 唄や踊りが息を吹き返した今日。

でも 勇ましいパーランクーと 心臓の拍動の中に 脈々と流れ続ける 確かな事実。

今日も一日が過ぎゆく。

あの日と同じ刻ときが過ぎゆく フェンスを飛びこえて 締め殺されゆく大海を泳いで 癒えることのないこの島の痛み 忘れてはならない 民の祈り 今日響きわたる 神聖なサイレンの音に 「どうか穏やかな日々を」 先人達の願いが重なって聞こえる。

おばあ、大丈夫だよ。

今日、私達も祈っている。

尊い命のバトンを受けて 今 祈っている。

おじい、大丈夫だよ。

この島にはまた 笑顔が咲き誇っている。

私達は 貴方達の想いを 指先にまで流れるあの日の記憶を いつまでも 紡ぎ続けることができる。

誓おう。私達はこの澄んだ空を 二度と黒く染めたりしない。

誓おう。私達はこの美しい大地を 二度と切り裂きはしない。

ここに誓おう。

私は、私達は、この国は この世界は きっと愛しい人を守り抜くことができる。

この地から私達は 平和の使者になることができる。

六月二十三日。

銀の甘蔗（かんしょ）が清らかに揺れる今日。

おばあ達が見守る空の下 私達は誓う。

私達は今日を生かされている。

## 2. ゲストコーナー(1) NPO まち・コミュニケーション理事 戸田真由美さん

「まち・コミュニケーション」の名称は初代の代表とスタッフが考えたもので、今の事務所の場所が阪神大震災で火災が発生し大きな被害を受け、住民（コミュニティ）が戻らないと本当の復興はないという想いで名付けた。

戸田さんがまちコミの仕事を始めたのは、震災3年後の1998年夏、神戸新聞や朝日新聞に広報担当としてニュース「月刊まち・コミ」を発行するボランティア募集の記事があり、広報活動に興味があった戸田さんは応募した。当時は明石市役所の臨時職員をしていたので、平日の夜や土日にまちコミの活動を始めた。

まちコミの活動は、より多くの人にまちづくりに関わる機会を提供し、現場経験を重ねてもらうことで主体的に行動し活躍できる人材の育成、豊かな地域社会の構築を目指している。事業としては3本の柱があり、被災地復興支援のまちづくりが基本にあって、復興を応援することが学びの場にもなり、交流の場にもなり発展していく形をとっている。

- (1) まちづくり : ①被災地復興支援 ②地域まちづくり支援 ③まちづくり研究調査
- (2) 学びの場づくり : ①震災体験学習 ②研修受け入れ ③講師派遣 ④まちづくり勉強会
- (3) 交流の場づくり : ①地域間交流 ②国際交流

災害が発生すると、復旧から復興過程に変わっていくが、まちコミのメインの活動は復興になる。現実には災害が発生すると、代表理事の宮定さんが中心になって直ちに現地に入り、被災地の状況を把握することから始めている。熊本地震で被災者から出された住宅の修復、家が壊れ誰に相談したらいいかわからないといった声には、まちコミがこれまでに築いてきたネットワークを使って建築士などの専門家に声をかけ、一緒に支援に行っている。熊本地震が4月14日、16日に発生し、5月のゴールデンウィークには専門家を派遣することが出来た。今の活動は聴きとり調査で、生活再建の状況を聞いている。地震発生時の状況、避難、今どうしているか、今後どうしたいかなど暮らしについて聴いている。調査はまちコミのメンバーと学生のボランティアが一緒になって教えて頂くというスタンスで取り組んでいる。被災者がどういう段階でどのような決断をしたのか、何を大事に思っているのか、自分の暮らしの中のこだわりは何かなど聞くことで、被災者自身が気持ちを整理し、今後暮らしの復興に当たって前向きな気持ちになってもらえるようにという思いを込めている。このような聴きとり調査の結果は、まちコミとしては今後の被災地の復興（事前復興）に生かしたい。今被災地が困っていることは今後の被災地の住民も困る可能性が高いので、東北、熊本の被災者の状況を次に伝えていきたい。

現在被災地訪問を続けているのは東北及び熊本で、訪問しているのは、代表理事の宮定さんがボランティアや専門家との連携で対応している。熊本の支援先は南阿蘇村西端の立野地区で、被災者の住民は長期避難世帯に認定されているため、家が住める状況であっても水道が出ないなどの理由で避難を余儀なくされている。東北には現在も支援を続けており、宮城県石巻市に2012年から拠点を設けている。雄勝への支援を継続しているが現在は高台移転が進んでおり、今後新しい場所でのコミュニティづくりが大事になってくる。

まちコミの事務局は代表の宮定章さん、理事の戸田真由美さん、そして理事の田中保三さん（兵庫商工会長）の3人が活動している。

### 3. ミュージック：「星になった日」by インストポップバンド” nica”

トロンボーンという管楽器がメロディーを取るインストポップバンド” nica”のオリジナル曲「星になった日」です。甲陽音楽学院の同期で結成したバンドで、トロンボーンは兵庫高校OB、92陽会の井浪直子さんです。

### 4. ゲストコーナー（2）

まちコミの事務所が入っている建物は、「みくら5（ファイブ）」という共同建替住宅で、建築設計図面の隅に御蔵通5丁目にあることから建築士が他の建物と区別するために「MIKURA 5」と仮につけた名称であったが、そのまま正式名称になった。この6階建ての建物は12軒の共同住宅で、1階にはまちコミの事務所の他に飲食店、以前は自転車店が今は住居になったもの、集会スペースなどがある。みくら5完成後防災まちづくり大賞の総務大臣賞を2002年に受賞した。今年防災まちづくり大賞20周年記念誌が発行されたが、記念誌の中で再度みくら5が取り上げられた。地元のまちづくり協議会は復興に向けて、まちコミと一緒に取り組んだことが評価された。選考委員は「まちコミの活動は、その設立から今日に至るまで損得なしのボランティア精神がずっと貫かれている。みくら5は専門職の集団ではないがボランティア団体がコーディネートした極めて希有で優れた事例として専門家の間では有名である。よ

そこから来た若者が被災者に寄り添い、聞き役になりながら被災者の主体性を引き出した賜物といえよう。・・・」と評価されている。



**みくら5 (ファイブ)**

**手形 (住民、ボランティア、建築関係)**

現代表の宮定章さんは 2000 年からまちコミの活動に参加し、2002 年から代表を務めている。宮定さんはしょっちゅう現場を飛び回っている所以地元の方からの信頼が厚い。東北の住民から、先ほどまで浜にいた宮定さんを食事に誘いたいけどどこにいるかと神戸の事務所に電話がかかったことがある。

御管カルタは 2003 年に作ったもので地域カルタの 1 種です。震災時の火災で地域の震災前の様子がわかる写真が殆ど残っておらず、戸田さんは住民の記憶の中にある町の様子を知りたいと思った。カルタを作ろうと呼びかけることで、句や絵を考えるので住民の記憶を集めることができ、カルタとして共有出来るのではという想いで取り組んだ。地域カルタは色んなところで作られていたので、舞子カルタを作った辻信一さんに手順、注意点などの作り方を教えて頂いた。カルタ作りに参加したのは、住民、ボランティア、専門家など幅広く声かけをした。句を作る人、絵を描く人など 133 人の協力を得て完成した。ひらがな 50 音というが、出来たカルタは同じ文字が複数枚あるカルタが出来あがった。沢山の人の関わってもらうため、句と絵は必ず別人にお願いした。親子や夫婦が句と絵を分担した例もある。カルタが完成した時カルタ大会、原画展を開催した。カルタ大会は盛り上がった。屋外の場合はビッグカルタ大会として A3 サイズの絵札を用意した。一つの句には句と絵の 2 人の作者がいるので、大人はたくさんカルタを取るのではなく自分の作ったものを取りたいので、取り合いになることがあった。御管カルタはまちコミで見ることができる。



被災地のつづやきは、被災地で生活再建聴きとり調査をしているが、そこで伺った声を出来るだけ多くの人に伝え、今後の災害に備えてほしい、自分と考え方の違う方、状況の違う方がおられるということ伝えていきたいと思い、フェイスブック、ツイッター、ブログで1日1話ずつ発信している。この取り組みは2016年2月から開始し、本日朝のつづやきが500話目になった。つづやきは宮定さんが聴いてきた話を戸田さんが客観的にわかりやすく整理して発信している。本日は阪神大震災に関するもので、語り部をしていた人がその想いを語ったものです。

被災地のつづやき (500話) 6月24日 7:00

私の震災体験が少しでも役にたつのならと思い、語り部を始めました。  
町並みがきれいになり自分の家が跡形もなくなると、伝えるのは難しいです。  
でも続けているのは、若い人たちに語ることが私のエネルギーになっているからです。  
(阪神大震災から13年/神戸市/70代女性)

500話のつづやきの中で戸田さんが気になったつづやきは、熊本のみなし仮設に6人家族で住んでおられる方が、家族が多いため避難所生活は厳しいので震災直後から住居をすぐに探したお話。ツイッターなどで「いいね」が多かったつづやきは、「私達の集落は震災前63世帯でした。東日本大震災では2世帯を残して津波で全壊。ようやく高台に造成地が出来32世帯が集落へ戻ってきます。幸せな暮らしを住民で模索し、戻ってきてよかったなと思える集落にしたいです。(女川町/60代/男性)」

前向きなつづやきは頑張してほしいと思うし応援したい。少し心配があると思っている熊本のつづやきは「東海大学の近くで農業をしています。震災前の農繁期は東海大学阿蘇キャンパスの学生に手伝いをお願いしていました。ところが熊本市内のキャンパスが拠点になると決まったそうです。やっと農業が再開出来ますが、人手が足りるか心配です。」

ツイッターとフェイスブックの反応の違いについて、理由はわからないが少し違いを感じる。つづやきをできるだけ多くの方に見て頂いて、いいねを押していただき、そうすることでいいねを押した人の友達にまで広がることになる。このような広がり事前復興に繋がる可能性を含んでいると思っている。震災に関心を持たない人も多く、いつ自分が被災者になるかわからない状況の中で、少しでも興味を持ってもらい、一人で出来る備えはしっかりやってほしい。

御蔵学校は阪神大震災後から続けているが、当初は現場で学ぶを主旨にしてきたが、今はまちコミが主催者として行っている勉強会です。毎回講師を招き、月1回開催している。次回は7月23日17時～まち・コミュニケーション御蔵事務局（神戸市長田区御蔵通5-211-4-101）で開催し、講師は立命館大学産業社会学部准教授 丹波史紀さん、テーマは福島を見続けた6年 避難指示解除区域の住民自治と福祉です。熊本地震に関しても被災地の最新情報は、この先生に聞かないとわからない最適の講師にお越し頂き、2時間かけてお話しして頂いている。



御蔵学校



講師 宮定代表

2004年10月台風23号の被災地である豊岡市出石町では農園を借りて野菜作り（玉ねぎ、ジャガイモ、黒大豆の枝豆）をしている。当初地元から地域を元気づけるために来てほしいと言われ、農作業の素人ばかりで取り組んだ。まちコミメンバーも土に触れることで多くの学びがあることに気づき、ボランティアも募集して継続して取り組んでいる。収穫した野菜は、活動の応援ということで全国の方に購入頂いている。



玉ねぎ収穫

